

会長挨拶

教育課程に位置づけが必要です

宮下 英雄



東京大学の弥生講堂に全国から参集して、今年もワークショップ形式を取り入れた夏の研究会が開催されました。獣医師会からは、動物を同伴してくださり、感性と知性、感動に満ちたふれあい教室を、無償で展開してくださいました。溜飲の下がる思いです。ありがとうございます。

さて、**学校の教育課程に、なぜ動物飼育の位置づけが必要なの**でしょうか。その根拠と要因を明らかにすることを求められたのが、講演で課せられた、私の責務です。詳細については、講演要旨に記載してありますので、お読みいただければ幸いに存じますが、本研究会は、発足当時から、動物飼育の教育的な価値、子どもの発達にかかわる大きな影響について、実証的に子どもの姿、行動から観察し、分析、考察を加えて、その価値追求を明確にして参りました。

かつて中島由香、無藤隆、中川美穂子各氏の共同研究の結果に、動物飼育の体験の有無によって、向社会的事項との関連性を基にした「優しさ」についての調査分析報告がなされ、動物飼育の体験の有無によって「優しさ」に有意差が生じていることが明らかにされました。

また、中川美穂子氏の「小学校での動物飼育体験のあり方から見た作文の分析」（2011修士論文）では、作文構成力、感情表現力ともに、学年飼育群が高い得点を示していることを明らかにされました。

東京都獣医師会は「学校飼育動物モデル校事業」として**作文コンクール**を実施しています。私もその審査員の一人として多くの寄せられた作文を読ませていただいています。どの作文も、感動させられる記述でいっぱいです。その感動を3つのキーワードで表現すれば、「世話をする動物への優しさ」「いのちを守りたい・大切にしたいという心」そして、日々の世話を通して「観察による動物の新たな発見」と言えます。多少の事例を通してこの上記の3点について説明をいたしますと、

(1) 動物への優しさへの実感と変容

とにかく動物の気持ちを考えて世話を続けています。特に、自分が動物だったら、どういう気持ちなのかとつぶやき「自分がいやだと思うこと、自分がされたくないということは、動物も同じだ」と考えて、実行。常に、相手の気持ちになって感情移入をしたり、同化したりしています。このことは周りにいる友達に対しても転移しています。

(2) いのちの大切さの実感と変容

えさを食べなくなった、動かなくなったという様子から、クラスみんなで心配し、元気の出るようなえさを持ってきたり、食べやすいように小さく切ってあげたりして、動物のいのちを守り願い続ける行動を自分たちで考えたり、獣医師の先生に診断

してもらったりしたときの必死な様子が記述されています。死を迎えたときの悲しみ、生前に対する感謝、いのちの大切さについての心の動きは感動的です。

(3) 動物の新たな発見と感動

動物一匹一匹の個体認識が豊かです。飼育の基本は、「観察に始まって、観察に終わる」と言われるくらいに観察認識が大切です。新たな発見には驚きをもって表現しています。また、動物の出産との出会いから、新しいいのちを必死に守ろうとしている母親の行動の偉大さを記述しています。

以上のように研究成果や作文を通して動物飼育の意義や価値を見出し、理解し、積極的に動物飼育の世話を実感を伴って実施することの重要性を強く感じています。計画的、意図的な実施活動が必要です。

次に、**どの学年担当が適切か**などの課題が生じてきます。3年生や4年生の担当が多くみられます。子どもの成長と発達については、多くの識者が、それぞれの発達理論にもとづいて様々な区別をしています。

エリクソン、ピアジェ、フロイト、ハヴィガーストも然りです。学校制度の対応も、この子どもの発達段階や発達課題を考慮して設定がされています。

その発達に即して、中学年である3・4年生の段階を総合的に考えると、身体的、知的、情緒、社会性の面すべてが活動的であり、収集意欲旺盛、理科的疑問旺盛、集団意識への高揚が見られる時期です。様々な場面や問題について、自主的に判断した

り、主張したり、行動したり、友達との協力関係を広げようとする事への課題挑戦の時期と考えられます。

教室での飼育活動を通して、責任感、いのちの尊厳、学級づくり、問題解決能力など、様々な側面について問題を意識し、自己解決しようとする集団意識が芽生えてくる最適な時期と考えられます。

また飼育場所等による飼育の欠点、利点についても考慮しなければなりません。

環境不衛生、授業妨害、怪我病気になるなどの欠点がリスクとして指摘されますが、その反面、動物愛護精神を養う、生命尊重心を養う、動物を深く知る、心を癒すことができるなどの利点が多く指摘されています。その他、休日等の世話、家庭の事情によって持ち帰り飼育ができない子やアレルギーの子もいます。ふんや尿の始末は、子どもにとっては大変な作業です。負担にはなるが、自分だけやらないわけには行かない。何もさせないのではなく、症状や状況に応じて、できる範囲のことで対応させることが大切です。

生き物を相手にすることは、その飼育の過程において常に多様な問題が発生します。その問題を適切に解決しなければ、時には、動物の死につながります。クラスの問題として、全体で解決する体験は、学級作りに大いに貢献していきます。

(前聖徳大学大学院教職研究科教授／

NPOこども科学教育振興協議会理事長)